

美への誘い

武田勝彦

「やまと歌はひとの心をたねとして、よるずの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけていひいだせるなり。」

「古今集」に付せられた仮名序は歌論としてまことに秀れたものであり真名序と共に世界の詩論集に組み入れられても、遜色のないものである。「ひとの心をたねとして、よるずの言の葉とぞなれりける」という主張に歌を心と詞との要素に分解する態度が明確にされている。この要素を極限にまで追いつめると抒情詩の世界が展開する。西欧の詩が叙事詩から出発したことと思い合わせると根本的な相違を見ることができる。元来、文学は地上を舞台とし、それを写實的に描写しようとする傾向と、地上からの飛翔を憧憬し、それを夢幻的に描写しようとする傾向が相剋していた。日本の文学でも「古事記」「日本書紀」などには、前者の傾向がかなり濃厚であるが、後者の傾向が作品の支柱となっていることはいうまでもない。

「旧約聖書」や「新約聖書」の場合には、後者の傾向が作中に顔を見せるものの、前者の傾向が支配的であることは、西欧文学を貫ぬくリアリズム精神が脈搏っているからであろうか。

「世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけていひいだせるなり」には抒情の内容が生活感情そのものであることを指摘し、その表現方法に言及している。この点を近代小説の成立と発展に結び合わせると、明治以後の私小説の源を見出し得るのではなからうか。ヨーロッパの小説に見

られる叙事性はどこまでもリアリズムに裏付けされたものであり、抒情性はかなり行間に追いやられている。ロマンティズムの文学として分類されているルソーの「告白録」にしても、ゴッテの「モーパン嬢」あるいはシャトブリアンの「アタラ」にしても、その叙事性は日本の小説に比較すると、はるかに色濃いものになっている。

日本の近世文学では、いわゆる八文字屋本あたりが、最もヨーロッパの小説に近いのではなからうか。特に、其磧の町人物、好色物などには、リアリズムの精神と手法が調和を保っているように思われる。ゴールズワージーなどと軌を一つにしているともいえよう。西鶴の町人物などもいうまでもなく、叙事性が高い。好色物でも、抒情精神はかなり薄れてしまっている。

このように鳥瞰的な見方を図式化しながら、現代の小説に直面すると、批評の基準の難さをいまさらのように思い知らされるのである。ひところ盛んであったニュークリティシズムも、燎原の火のように広がったものの、20世紀の後半に入ると、ふたたび反動の機運が見え始めた。エリオットの思考方法から、ペイター的なそれへと回帰する徴候すら見られるほどである。

人類の歴史と共に始まった文学の歴史は古く、長い。古代印度の「パンタチャントラ」は仏教の東漸とからみ合って、東方の島国に流れ落ちて、「今昔物語」に入りこみ、さらに芥川へとその尾を曳いている。一方、西方へ向った「パンタチャントラ」は動物寓話となったり、ラ・フォンテーヌ、グリム兄弟にまで生き延びて行った。

このような文学の流れを考え、批評の基準を樹立しようとする時、結局は美に集約されるのではなからうか。この手続きについては、

最近の『文学界』（44年9月号）に「二元的批評の基準」と題して詳細に述べたのでここでは省略させていただく。要は、美の定義ということになるのであろう。川端康成先生は、ハワイ大学ヒロ分校での「美の存在と発見」と題する講義の中で、「竹取物語」に言及された折、「すべて『竹取』の作者の、美の発見、感得、創作と信じて、自分もところざす、日本の小説の元祖の着想が、なんとも言へず美しいのは、ふるへるほどのよろこびでした」と述べておられた。この「ふるへるほどのよろこび」を与えるものこそ美そのものであるという見解は巧まずしていい得た美の定義であろう。先生はこの講義の冒頭でカハラ・ヒルトン・ホテルのテラス食堂のコップにも美の発見をされたと述べられている。私も先生に招かれてこのテラス食堂に同席していたのだが、コップに美を見出さずに終わってしまった。先生と私の位置の相違もあったろう。興味の対象も異なっていたろう。美に対する感受性の差もあったろう。それにしても、私は美の発見が出来なかったことは事実である。この一事についても深く反省させられることは、批評家は美の存在と発見を感得し、これを識別し、これを表現し得なくてはならないということである。

この随想を読まれるかたがたは、ヨーロッパの、それもイギリスの文学を専攻されるかたがたである。私は不幸にして、イギリスの文学を専攻したことはなかった。したがって、イギリスの文学に美を発見する機会にも恵まれなかった。しかし、幸にして異国の文学を学ばれるかたがたが、そこに美を発見され、ふるへるほどのよろこびを味われることができれば、それほど幸福なことはなかるうと思っている。